



第1面に掲載

難航する原発汚染水処理

本格的な対策をどう打つべきなのか。熱工学の観点から原発事故の解析や廃炉に向けた対策を提言してきた東北大学流体科学研究所の圓山重直教授に汚染水問題を解決するために政府、東電が何をなすべきかを聞いた。

東京電力福島第一原子力発電所で続く汚染水処理問題の収束作業が難航している。汚染水対策に全力を挙げるといふ政府、東電だが、トラブルが後を絶たない。今そこにあるリスクにどう立ち向かい、廃炉に向けて根

東北大学 流体科学研究所教授 圓山 重直氏

「今すぐに汚染源となっている原子炉建屋を隔離し、そこに流れ込む地下水を遮断すべきだ。その上で建屋内に封じ込めた汚染水を、直接炉心に注入して冷却。汚染水は建屋の中で循環させれば、これ以上は増えない。汚染水の増加を止めてから腰を据えて廃炉の

「汚染水をめぐるトラブルが相次いでいます。根本的な対策を講じてこなかったのが原因だ。汚染水はもともと断たなければだめだ。福島第一原発の敷地には阿武隈山系から日量約1000トの地下水が流入し、うち同400トが原子炉建屋に流れ込んでい



汚染源「原子炉建屋」隔離急げ

作業をするのが鉄則だ。政府が予定している「土を凍らせて地中に遮水壁をつくる凍土壁は有効だろうが、

「原子炉建屋とタービン建屋の周囲にセメントミルクなどを注入するための穴を多数開ける。その穴から

「原発事故でも活用した水が循環冷却システムを原子炉

「現場で行っているひとつの対策は正しいが、総合すると誤った方向に向かっていることもある。事故発生から2年半以上たっ

「指摘はシンプルですが、具体策の相上にあがっていません。」「現場で行っているひとつの対策は正しいが、総合すると誤った方向に向かっていることもある。事故発生から2年半以上たっ

「指摘はシンプルですが、具体策の相上にあがっていません。」「現場で行っているひとつの対策は正しいが、総合すると誤った方向に向かっていることもある。事故発生から2年半以上たっ

まるやま・しげなお 1977年(昭52)東北大工卒。79年ロンドン大学インペリアルカレッジ航空工学科修士課程修了、83年東北大院博士課程修了、同年同大学助手。89年米パデュ一大客員研究員などを経て97年から東北大流体科学研究所教授、12年4月副理事。新潟県出身、58歳。

めることを主眼とした対策をかけた処理すればいい。この一連の作業を終えた上で、並行して除染している中で、恒久的な外側シールドを建設するべきだ」

外部の意見取り入れ終止符を
圓山教授は「にも確立された手法が多熱流体工学の、今すぐでも実行で専門家。原発事故を純粹な物理現象と捉積極的に取り入れて汚染水問題に終止符を打ち、廃炉に向けた作業を前進させるべきだ。」(仙台千田恒弥)

記者の目